

標記の会は、都立大&首都大卒業生で都市と住宅に関心を持つ者たちによって1980年に設立されました。会報169号の冒頭には、石田先生をしのぶ集い・追悼集の紹介がされていますので、会の方承を得て掲載いたします。

# 会 報

NO.169 2016.12.14

石田頼房先生をしのぶ集い  
(第71回記念講演会)の報告・・・P.1・2

## 石田頼房先生をしのぶ集い (ご報告)



平成28年10月29日、昨年11月3日にお亡くなりになった石田頼房先生をしのぶ集いが明治大学駿河台キャンパス・リビティタワーで開催されました。

この会は先生の一周忌を前に、

東京都立大学時代の都市計画研究室出身者が中心となって、石田先生のご功績を今一度心に刻み込むとともに、ここから次世代の都市計画研究の発展を考える機会となるよう企画されたものです。発起人の皆さまは、いずれも石田頼房先生と様々に関わりがあった方々が名前を連ねてください、178名出席という大変盛況で実り多い追悼シンポジウムと交流会となりました。会の様子は下記のURLに当面の期間は動画をアップしているのでご確認ください。また、会員による報告の当日配布資料なども、本会ホームページで公開しておりますのでご参照ください。

第一部 <https://youtu.be/btYtENYMGQk>

第二部 <https://youtu.be/s9Ra3MHU4Cw>

### ■追悼シンポジウム第一部 <報告>

#### 「石田頼房先生から手渡されたもの/次世代へ手渡すもの」



シンポジウムは、重永会員(S55)の司会のもと、高見澤邦郎先生の開会挨拶から始まりました。高見澤先生からは追悼集とシンポジウムの構成やテーマの説明を通じて石田先生の「生きた証」について考えてい

く場となるよう、との呼びかけがありました。

その後の報告では、まず計画者としての石田先生の側面を先生が深くかかわってきた吉祥寺・立川・大瀨村・小国町を歩き考えてきたことを大竹代表(S55)から報告があり、次に教育者としての石田先生の証ともいえる教

え子の心に残る45のキーワード集の整理報告について古里会員(S53)が行い、その後の会員ワークショップの結果を市古会員(H08院)が、そして総括的な整理を東濃会員(S53)から報告しました。これらの提案は、追悼集でも紹介しておりますのでご覧ください。

### ■追悼シンポジウム第二部 <討議>

#### 「石田頼房先生-都市計画研究者・実践者としての業績-」

コーディネーターの中林一樹先生から「いわば第一部は教え子たちによる内部評価だったのに対し第二部は外部評価」と紹介されてスタートした後半戦は、渡辺俊一先生(東京理科大学名誉教授)の石田先生の業績報告と前期・後期で研究スタンスが大きく変わった背景などについての解説があり、若手研究者に向けて石田頼房アーカイブの幅広さと研究記録システムに特徴がある石田研究をぜひやってほしいとの呼びかけがありました。これを受けて壇上には、次世代の都市計画研究者として中島直人先生(東京大学准教授)と饗庭伸先生(首都大学東京准教授)が並び、中林先生から中島先生には「都市計画史論」、饗庭先生には「計画論」からの発言が求められました。



中島先生がご用意いただいていた資料はまさに渡辺先生の呼びかけに応じて石田都市計画史論を研究フィールドでどのように位置付けられるか、といった整理があり、



標記の会は、都立大&首都大卒業生で都市と住宅に関心を持つ者たちによって1980年に設立されました。会報169号の冒頭には、石田先生をしのぶ集い・追悼集の紹介がされていますので、会のご了承を得て掲載いたします。



石田先生が語らなかった研究フィールドのご提案がありました。一方、饗庭先生からは「都市計画とは都市の発展法則性に働きかけて都市を変えること」という石田先生の言葉から、都市計画を支える法と制度の役割を整理し、石田先生からの宿題として、地域コミュニティが希薄になりつつある現代の制度と実践のあり方について検討していきたい、とのお話がありました。

ここで、中林先生から3名の先生方に石田先生の研究の変換点に何があったと思えるかとの投げかけがあり、それぞれ、社会問題への追及の延長上に歴史研究があったとの見方、時代の流れと少し距離を置こうとした石田先生の姿勢がうかがえる点や都市計画史研究を通じて上からの都市計画の限界と「反計画」に代わる法則性を見つめ直そうとしたかに見えるとの指摘がありました。また、石田計画論のポイントは制度（システム）が重視されていて、人の話が出てこないことも興味深いとの指摘もありました。

会場からの「石田論」として、オランダから来られたカローラ・ハイン先生からは国際会議でのエピソード、次いで広原盛明先生からは制度が揺らいでいる今は多様な実践と行動が求められているので若い人は恐れずチャレンジして欲しいとのメッセージをいただきました。蓑原敬先生からは石田先生が重視していた合理性と個人の主体性を重視して時代に関わることはこれからもより大切になること、小林重敬先生からは都市計画法の抜本改正を声高に言っても通じない中、ハードとソフトを含む枠組み法の実現に期待したいこと、大村謙二郎先生からは石田先生が育てた人材に感心したこと、五十嵐敬喜先生からはまさに変換時期に議論を交わした身として同時代の論客が何を考えてきたかを見ていく必要性について、中井検裕先生からは都市計画学会としての研究倫理やモラルについての思いがあったこと、野沢康先生からは工学院大学時代のエピソード、最後に松山恵先生からは最晩年の若手研究者との交流会のお話をいただき、石田先生の新たな側面に触れた思いがありました。

## ■追悼交流会



火花が散りそうなシンポジウムの緊張から一転、会場を夜景がきれいな23階岸本ホールに場所を移し、追悼交流会が行われました。

開会にあたり、東西のまちづくり実践の立場でそれぞれご活躍の林泰義、塩崎賢明両先生からそれぞれの研究文化背景の違いをふまえたご挨拶をいただき、その後、石田先生の先輩として高山研究室時代を過ごされた川手昭二先生から石田先生の若いころのエピソードをお伺いして献杯、後に自由に交流という流れで会は進みました。会場には先生の著書を始め、学生時代の作品などが展示され、ご家

族しか知らない石田先生の側面もうかがい知ることができました。

そして最後に石田先生のご子息の周一様よりご挨拶をいただき、石田先生をしのぶ集いは終了しました。ご家族の皆さまにとっては、先生の研究者としての顔を知ることになった良い機会であったとのことでした。



※ しのお集いの運営と追悼集の作成にあたっては、当会メンバーが様々にかかわってきました。皆さまの多大なご協力があったからこそこの盛会だったかと思えます。ご協力いただいた皆様方に感謝いたします。



小平霊園の墓石写真  
(ご家族提供:墓石は石田先生がデザインされたものとのこと)

(報告・文責)

発起人メンバー 藤井祥子(S62卒)